初期慕容鮮卑の墓制と親族構造に関する予察
―北票大板営子墓地の検討から―

廣 瀬　覚

1．はじめに

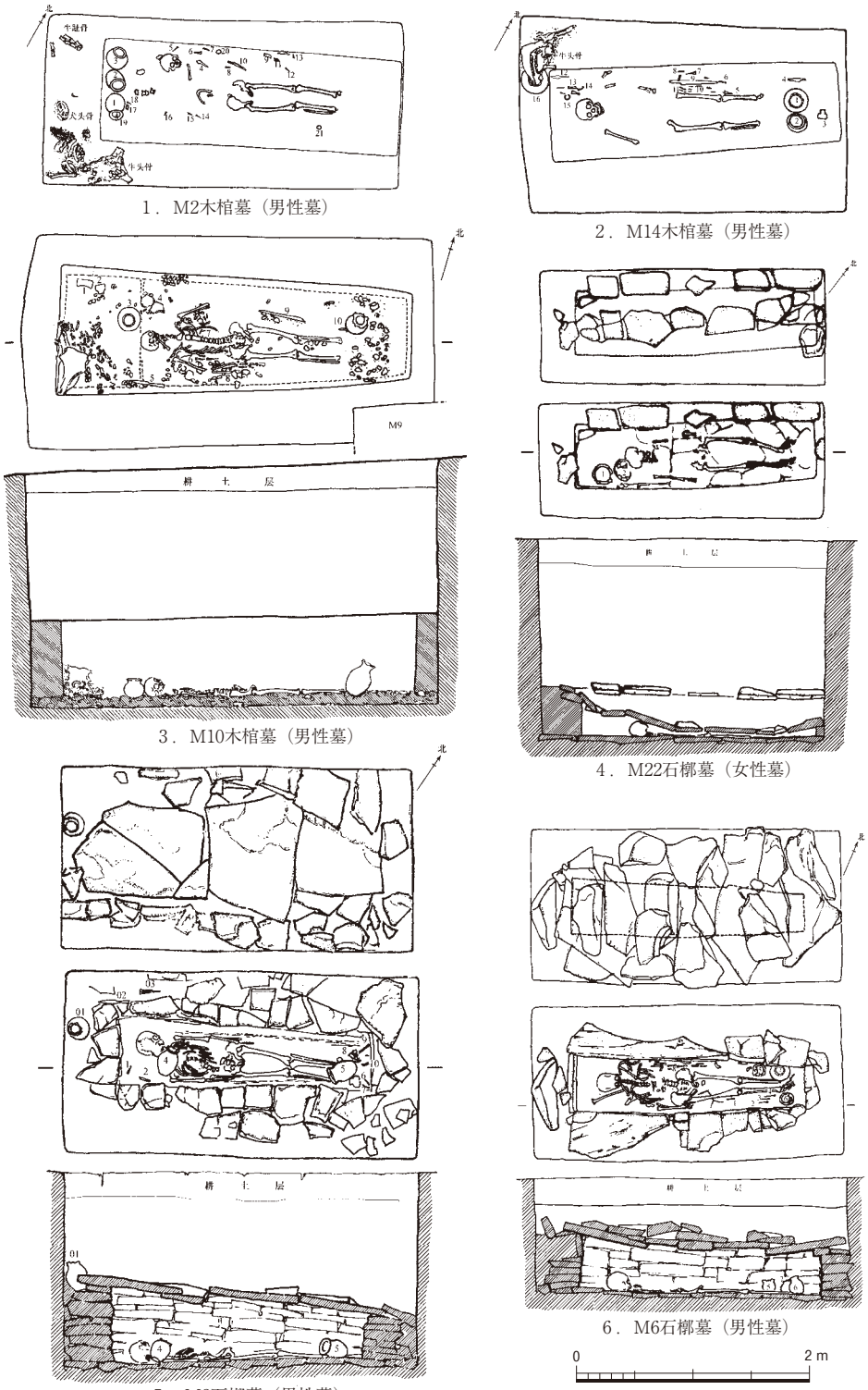
大板営子墓地は、北票市大板鎮波台沟台村に所在する初期の慕容鮮卑のものとみられる集団墓地で、1994年と1996年の２次にわたる発掘調査で23基の竪穴系の埋葬施設が検出されている。大淩河を挟んで東約10㎞には、総数435基を数える三燕文化最大規模の墓地遺跡で、倭の古墳文化にも影響をおよぼしたとみられる装飾馬具や装身具が出土したことで著名な喇嘛洞墓地が所在する。大板営子墓地は、墓地全体の規模や副葬品の内容において喇嘛洞墓地よりも大きく劣り、階層的に下位に位置づけられる集団の墓地であることは疑いない。しかしながら、年代的には喇嘛洞墓地とほぼ同時期の所産と考えられ、埋葬施設の構造には類似性も認められることから、大板営子墓地の造営集団の性格を究明する作業は、初期の三燕文化の実態理解において重要な鍵を握るといえる。

ところで、遼西地域の発掘調査で検出される墓地では、時代を問わず総じて人骨の残りが良い。大板営子墓地でも、各墓から人骨が出土しており、報文では各墓の埋葬施設の構造と副葬品の内容とともに、人骨の年齢と性別に関する鑑定結果が併記されている（万欣2010）。本論では、それらを基本データとして大板営子墓地の造営過程と親族構造について若干の検討を試み、初期慕容鮮卑の墓制と集団構成のあり方を考える一助としたい。

2．大板営子墓地の概要

検出された竪穴系の埋葬施設23基の内訳は、木棺墓11基、石槨墓12基で、両者とも墓坑の最下部に木棺を安置する。墓坑は長さ2.5～2.7m、幅１m前後が標準的であるが、やや大型ものでは長さ３m前後、幅1.2m前後におよぶものがある。深さは、残りの良いもので２m前後に達する一方で、木棺や石槨の高さは0.4～0.6mであり、墓坑が必要以上に深い印象を受ける。墓坑底には、木棺墓ではバラス、石槨墓では板石を敷き詰める。

木棺墓では、棺を設置したのちに、棺と墓坑壁の間に土砂を充填して、小口板や側板を固定する。石槨墓も同様に棺を囲むように壁状に板石を積み上げる。この作業により、棺の周囲にはテラスが形成される。このテラス状の施設は、おそらく棺上面の高さに相当するのであろう。同部分から棺外副葬としての土器や犬・牛骨が検出された事例がある点も、そのことを推測させる。なお、報文では、石槨墓のうち壁体に板石を箱式石棺状に立てか



1．M2木棺墓（男性墓）

2．M14木棺墓（男性墓）

3．M10木棺墓（男性墓）

4．M22石槨墓（女性墓）

5．M8石槨墓（男性墓）

6．M6石槨墓（男性墓）

図1　大板営子墓地の木棺墓と石槨墓　1：60

ける構造をとるM5を石板墓として細分するが、墓地全体で１基が検出されているのみであり、ここではその差は強調しないでおく。

木棺の平面形は、木棺墓、石槨墓を通じて、比較的単調な方形プランのもの（図１－１・２・４）と、頭部側が幅広で足部側が幅狭となる台形プランのもの（図１－３・５・６）の両者がみられる。後者に属する石槨墓であるM8では、頭部側の小口壁と足部側の小口壁で25cm程の高低差があり、結果的に天井石が頭部側から足部側にむかって大きく傾く。上述のように、板石積みの上面テラスが棺の高さに相当すると考えられることからすると、この天井石の傾きは木棺上面の形状をそのまま反映しているものと推測できる。すなわち、大板営子墓地で使用された木棺の中には、一方の幅・高さが極端に大きい、いわゆる「片流れ形式」のものが採用されていたと理解できる。

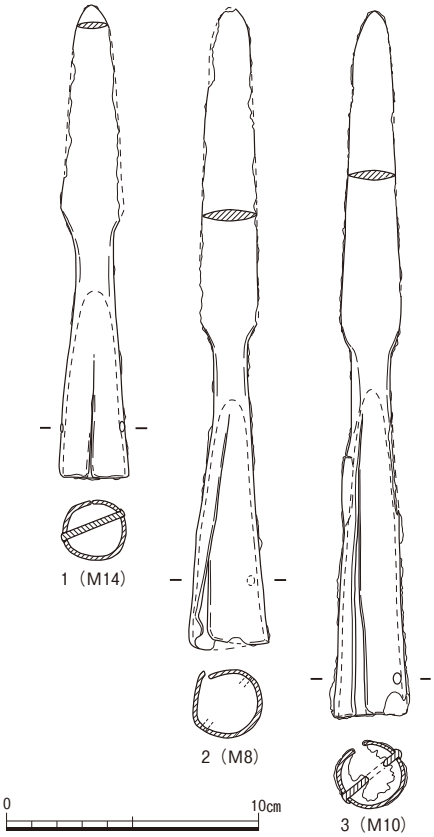


図２　大板営子墓地出土の鉄矛

岡林孝作は、漢代の木棺が総じて単純な箱形を呈するのに対し、「片流れ形式」木棺の早い事例が、三燕期の遼西地方や、代～北魏盛楽期の内蒙古中南部地方などにみられることから、この種の木棺と鮮卑との関わりを指摘する（岡林2004）。大板営子墓地にみる幅・高さが極端に大きい一群の木棺は、３世紀末～４世紀初頭とされる朝暘田草溝２号晋墓（遼寧省文物考古学研究所ほか1997）などとともに、慕容鮮卑における初期の「片流れ形式」木棺の事例として評価できる。かつ、同木棺の存在は、動物の殉葬とともに、大板営子墓地の被葬者集団が鮮卑系の集団であることを裏付けるものといえよう。なお、立面的にも「片流れ形式」木棺の使用が確実であるM8では、石槨四隅付近から鉄釘が出土しており（図版２－２）、棺材の接合に釘を使用していたことが判明する。

副葬品は、武器（鉄矛・鉄刀・鉄鏃）、工具（鉄斧・鉄鎌）、装身具（金銅・銀耳環、銅釧、銅・鉄指環、瑪瑙玉、陶器片転用・骨紡錘車）、五銖銭、土器などがある。鉄矛、銅釧、銅指環、瑪瑙玉、五銖銭などの副葬は、内蒙古における初期鮮卑の墓地とも共通しており、副葬品目からも鮮卑の墓地であることが裏付けられる。しかしながら、喇嘛洞墓地と比較すると副葬品の構成は総じて簡素であり、M16の金銅・銀耳環、M21の銅釧にみるセット関

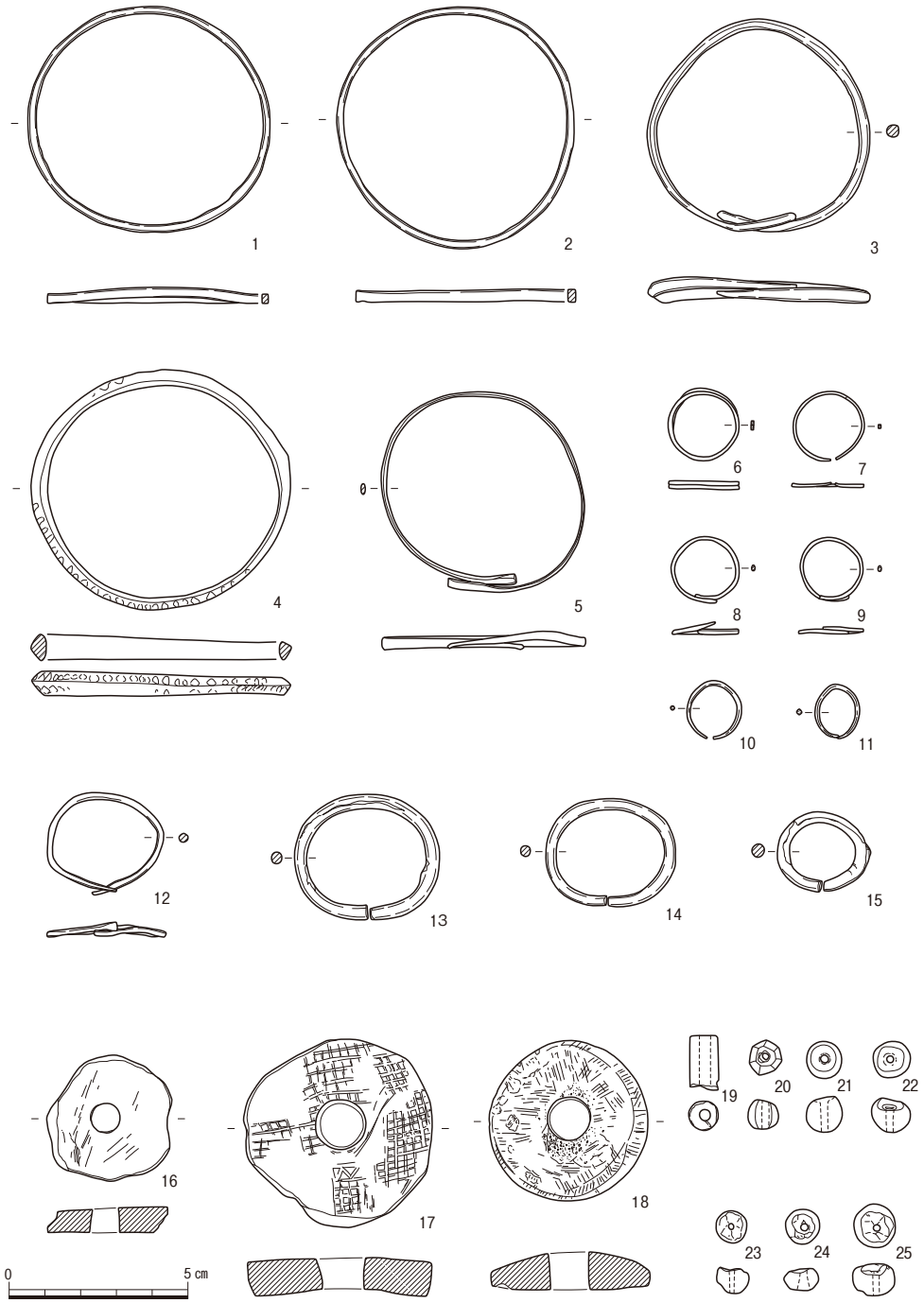


図３　大板営子墓地出土の装身具　１：２

１・２：銅釧（M1）　３：銅釧（M22）　４・５：銅釧（M21）　６～９：銅指環（M1）　10・11：銀指環（M7）
12：銀耳環（M16）　13：金銅耳環（M16）　14：金銅耳環（M2）　15：金銅耳環（M21）
16：陶器転用紡錘車（M16）　17：陶器片転用紡錘車（M21）　18：骨紡錘車（M21）　19～25：瑪瑙玉（M7）

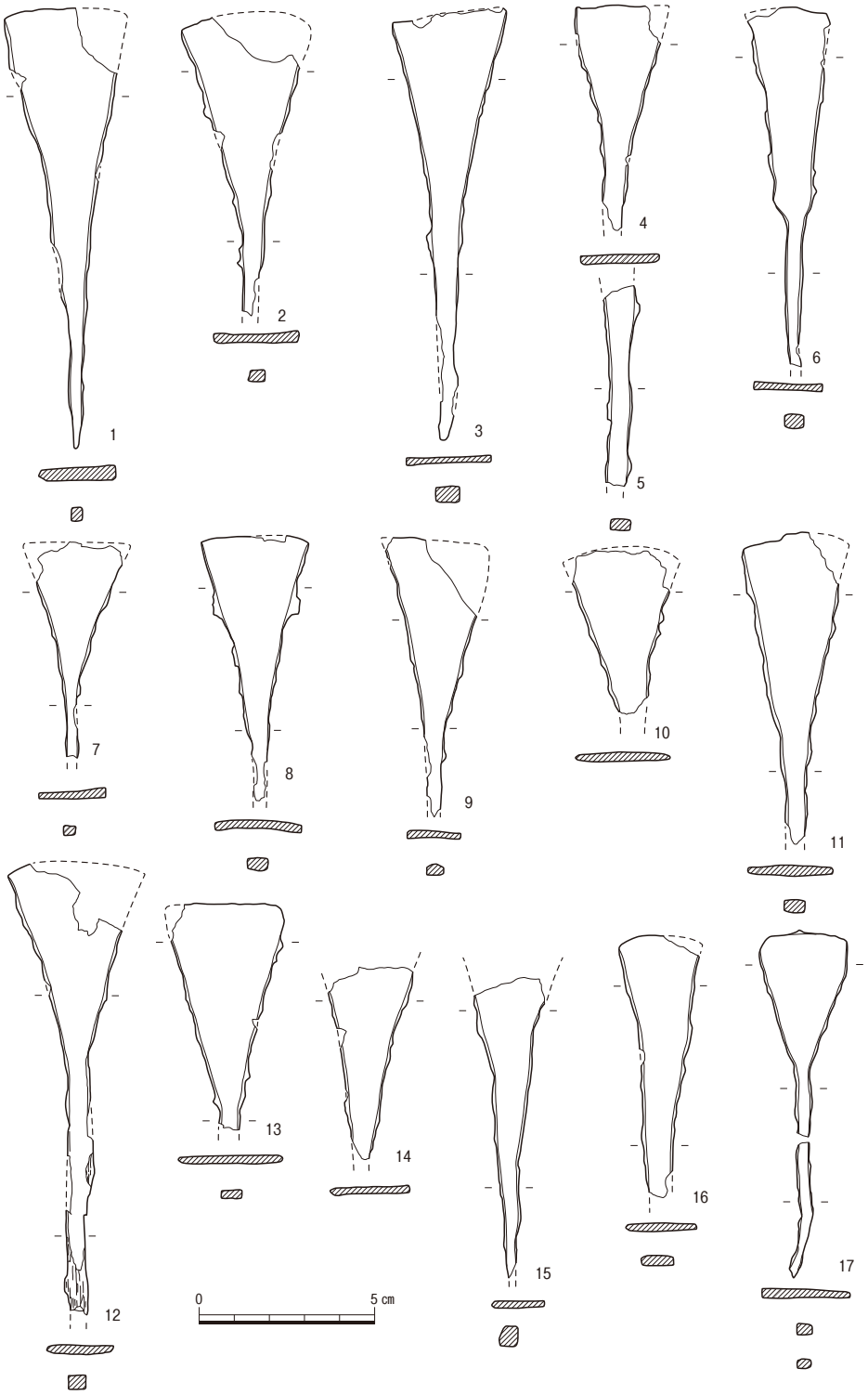


図４　大板営子墓地出土の方頭形式の鉄鏃　１：２
１・２：M2　３～６：M20　７～９：M14　10・11：M3　12：M8　13～15：M10　16・17：M6

係の乱れを勘案すると、最終的に副葬されることになる品目の入手には一定の制約が生じていた様子がうかがえる。とりわけ馬具類の副葬が全くみられず、代わって鮮卑墓では稀な工具類が出土している点は、鮮卑内での被葬者集団の具体的性格を考える上で重要となろう。

これらの副葬品のうち、大板営子墓地の造営年代を検討しうる品目はそう多くはない。まず五銖銭は、直径や方孔の大きさ、銭文の特徴から、後漢代のものに比定できるが、あくまでも造営年代の上限を示すに過ぎない。同じく五銖銭が出土し、後漢晩期に比定されている内蒙古地区商都県東大井墓地（魏堅編2004）からは、外面に花弁形の装飾を施した銅釧が出土しているが、大板営子墓地出土の銅製腕輪は刻み目をもつものが１点出土しているのみで（図３－４、図版１－５）、その他は装飾をもたない簡素なもので占められる。一方、３点出土した鉄矛はいずれも袋端部が直線を呈する直基式であり、喇嘛洞墓地で直基式とともに出土している山形抉り式が含まれないことから（図１、図版１－１）、これが両墓地間の年代差を反映している可能性がある（諫早2014）。報文では、主に出土土器の位置づけにもとづいて、大板営子墓地の造営年代を「３世紀中晩期」に比定するが（万欣2010）、土器の年代的な位置づけについては、今後の検討課題としたい。

なお、鉄鏃には、長頸鏃や三翼鏃（図版２－１右端）も少量出土しているが、主体を占めるのは報文がＢ型鏃とよぶ方頭形式のもの（図４）である。その形状は特徴的で、長い頸部から関を設けず、刃部にむかって側辺が大きく開いて銀杏葉形を呈する。その形状からすると、実用品であったかどうか疑わしい。万欣が鋤形鏃とよぶこの種の鏃は、十六国期に出現した後、唐代以降も存続するようで、中原の唐墓では出土しないことから、万は北方騎馬民族の特色を示すものと評価する。万によれば、遼代の儀式で用いられた「横鏃箭」は鋤形鏃と全く同じ形状を呈するとのことであり（万欣2013）、この種の鏃の性格を考える上で興味深い。

３．大板営子墓地の構造と変遷

次に大板営子墓地全体の構造を検討し、その造営過程を検討する。まず墓の分布状況をみると、検出された23基のうちの20基は、いずれも頭位を南西に向け、並列する二つの墓列を形成している点が注目される。二列間の距離は、墓坑の短辺間で２～3.5m程を測る。一方、それらの一群とは異なり、調査区東側のM1とM18の２基は頭位を南東に向けており、西側の20基とは群構成を異にする。M1とM18は縦列の関係で築かれており、その距離は墓坑の短辺間で西群と同様に3.5m程を測ること、M18は調査区東端に位置し、M1も北東側に崖面が迫ることから、調査区および崖面の東側には二列に配置された別の墓群が存在し、M1とM18はその一群の西端をなす蓋然性が高い。ここでは、全体の構成が判明

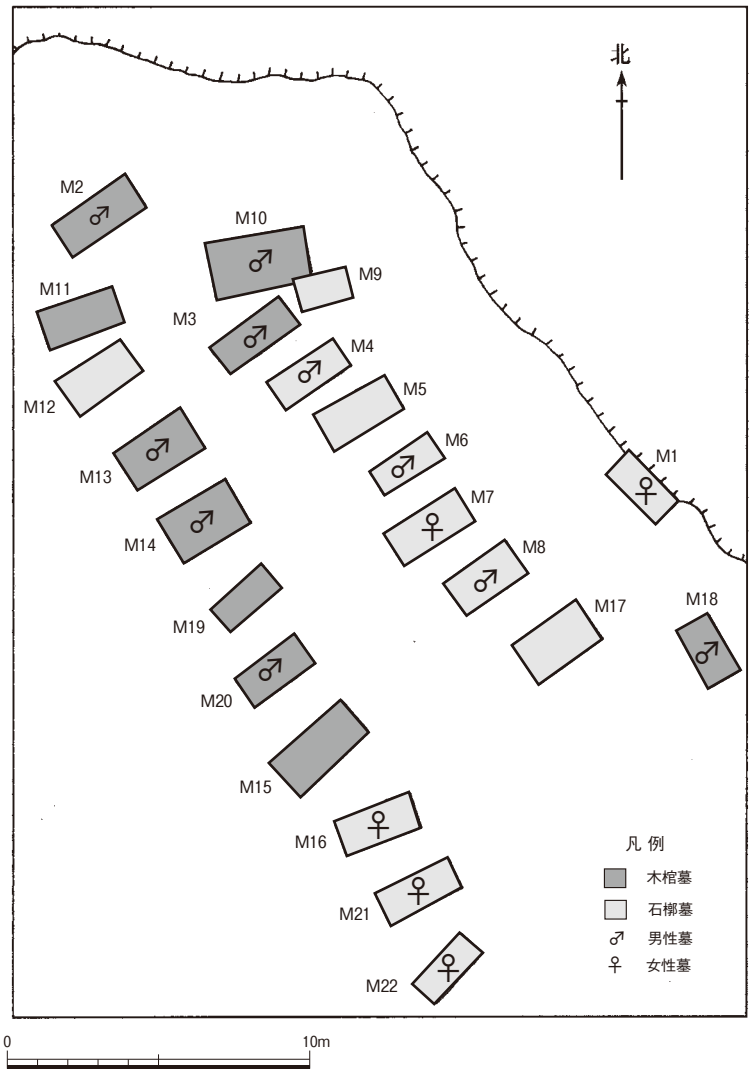


図５　大板営子墓地の埋葬構造と性別　１：250

する西群を中心に検討を加える。

改めて西群の分布状況を詳しくみると、巨視的には、西群では東西二列とも、木棺墓は北側に、石槨墓は南側に分布する傾向が認められる（図５）。その上で、木棺墓のM10の墓坑を一部壊して石槨墓のM9が築かれていることからすると、木棺墓が先行して築かれ、それに遅れて石槨墓が築かれた可能性が示唆される。そのことは、出土遺物からの様相からも傍証される。例えば陶器では、木棺墓出土のＡ型壺（M2、M10）は頸部の立ち上がりが相対的に長く、肩部に張りを留めるのに対し、石槨墓出土の同壺（M6、M12）では頸部が短くなり、肩部の張りも失われている（図６）。また、鉄鏃の中で比較的まとまった数量が出土している方頭形式のものに着目すると、木棺墓出土のもの（M2、M3、M10、

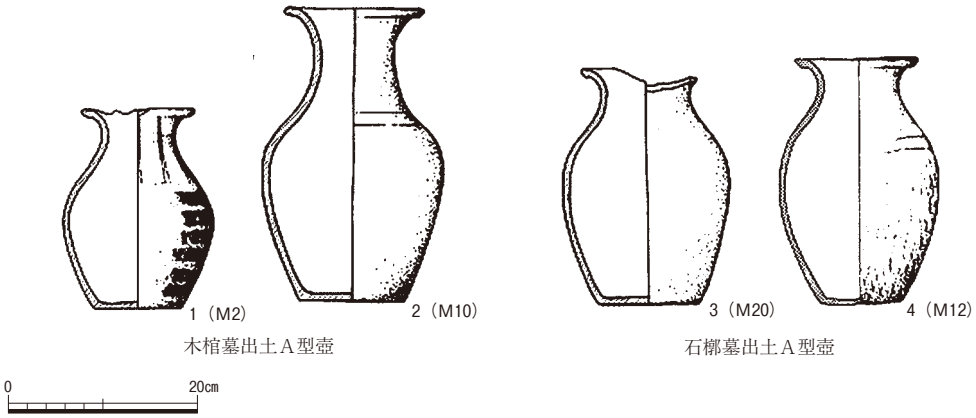


図６　大板営子墓地出土Ａ型壺にみる形態変化

M14、M20）は側縁が緩やかに内彎し、端部幅が３～3.5cm程に達するのに対し、石槨墓であるM6出土のものには、側辺が直線化して開きが弱くなったり、鏃部の長さ４cm以下に縮小して三角形形を呈するなど、本来の銀杏葉形の形状から逸脱したものが含まれている（図４－16・17）。

このように遺構の重複関係、土器や鉄鏃の形態変化から、木棺墓と石槨墓という埋葬施設の構造差は、概ね時間差に起因するものと理解できる。二列に整然と配列された墓群のなかで、総じて木棺墓が北側に、石槨墓が南側に偏って分布する点は、同族的な集団が北側から継続的に造墓を展開する中で、ある段階において埋葬構造が木棺墓から石槨墓へと変化した状況を示すものと考えられる。

ただし、遺物にみる形態変化がさほど大きなものではないことからすると、造墓活動全体は、せいぜい２世代程度の期間であったと推測されよう。すなわち木棺墓に埋葬された集団を第一世代、石槨墓に埋葬された世代を第二世代と捉えることができるが、第一世代、第二世代ともに、検出された墓数は10基程度であり、これが大板営子墓地の一時期における単位集団の構成員の規模を示しているものと理解できる。前述のように、本来、崖面の東にも別の墓群が存在した可能性が高いことからすると、墓地全体ではこうした単位集団が同時期にさらにいくつか存在し、それらが集まって一つの母集団を形成していたものと考えられる。

４．埋葬者の性別と副葬品の関係

次に出土人骨と副葬品との関係からで、大板営子墓群を造営した集団の親族構造に迫ってみたい。人骨が出土した21基のうち、成人男性と判定された人骨の出土墓は、M2・3・

表１　大板営子墓地の副葬品と性別の判定

	木棺墓	石槨墓	鉄鏃	工具類	鉄鉾	鉄環	耳環	銅釧	銀･銅環	瑪瑙玉	紡錘車	簪	人骨鑑定	性別推測
M2	○		○			○							成年男性	男性
M3	○		○	○									成年男性	男性
M4	○		○	○									成年男性	男性
M10	○		○	○	○								成年男性	男性
M13	○		○										成年男性	男性
M14	○		○	○	○	○							成年男性	男性
M20	○		○	○									成年男性	男性
M18	○		○										成年男性？	男性
M8		○	○	○	○								成年男性	男性
M6		○	○										成年男性	男性
M1		○						○	○	○			成年女性	女性
M7		○					○			○		○	成年女性	女性
M21		○					○		○	○	○		成年女性	女性
M22		○							○				成年女性？	女性
M16		○					○				○		成年男性？	女性
M11	○												成年男性	？
M19	○												成年男性	？
M15	○												未成年男性？	？
M5		○											成年男性？	？
M12		○											成年男性	？
M17		○											不明	
M23		○											不明	
M9		○											子供性別不明	

6・8・10～14・19・20で、その他に成人男性？とされるものにM4・16・18の３基がある。さらに、M9は性別不明の児童とされ、M15も未成年で性別は男性？とされている。一方、成人女性と判定された人骨が出土した墓は、M1・7・21の３基であり、断定されるには至っていないもののM22もその可能性が指摘されている。以上を踏まえて、副葬品目と性別との対応関係を検討してみよう。

まず、男性と判定された人骨出土墓に伴う副葬品として、普遍的にみられるものは鉄鏃と工具類である。また３例だけであるが、M8・10・14からは鉄矛が出土している。言うまでもなく鏃と矛は、武器であり、工具も力作業に関わる物品として武器との共通性を有する。これらは大板営子墓地の女性人骨出土墓からは一切出土していないことから、男性に限定的な副葬品目と判断できる。ただし、男性と断定ないしは推定された人骨出土墓の中には、武器・工具を含まないものが（M5・9・12・15・16）存在する点には注意を要する。武器・工具を含まないことが女性墓であることの絶対条件とはならないが、人骨鑑定が確定的でないものについては、女性墓である可能性を残しておいた方がよいだろう。逆に、人骨の鑑定からは男性であることが推定にとどまっている墓の中で、鉄鏃が出土しているM4・18・20については、その点をもって積極的に男性墓と断定してよかろう。

一方、女性人骨出土墓に特有の副葬品としては、金銅・銀耳環、銅釧、瑪瑙玉、陶器転用・骨紡錘車を指摘できる。唯一例外は、報文で男性人骨？と推定されたM16のみであるが、上述のようにこの墓からは男性墓であることを示す武器や工具類が出土していない。

代わって女性人骨との共伴例が確認できる耳環、陶器片転用紡錘車が出土していることからすると、M16については積極的に女性墓である可能性を見込んでよかろう。この他、女性人骨出土墓には、銅・銀指環が伴う傾向がある。指環については、直径２～３㎝の鉄製のものが男性人骨出土のM2・14から出土しているが（図版３－６）、これを除く銅・銀製のものについては女性墓に出土が限定される。あるいは鉄製の「指環」については、指輪以外の用途を想定すべきかもしれない。

このように、大板営子墓地では、金銅・銀製耳環、銅製腕輪・指輪、瑪瑙玉、陶器片転用・骨製紡錘車は、女性墓に優位な品目と捉えることができる。女性人骨の可能性が指摘されたM22については、銅釧が出土していることからも女性墓と断定してよかろう。このほか、１点のみであるが、骨製簪が人骨鑑定、副葬品の構成から女性墓であることが確実なM7から出土しており、簪も女性を特徴づける副葬品とみることができる。

以上を整理すると、大板営子墓地で男性墓と断定できるものは、M2・3・4・6・8・10・14・15・20、女性墓と断定できるものはM1・7・16・21・22となる。その分布をみると、女性墓と断定できたものは、見かけ上は石槨墓に集中するものの、第二世代全体では女性墓の占める割合は著しく高いわけではない。鉄鏃・鉄矛が出土しなかった木棺墓（M11・15・19）の中に女性墓が含まれている可能性があることを踏まえると、全体としては男女の構成比はおおむね拮抗状態にあったものと理解できる。

５．墓制から親族構造を研究する視点

以上のように、大板営子墓地では、一世代10人前後が集団の基本単位となっており、かつそこでの男女の構成比は半々程度であったという状況を復元することができた。それらの中には、児童や未成年と判断された人骨も含まれており、それらも成人と同構造の墓を築いて、埋葬されていた状況も読み取れる。前述のように、墓群は本来、東側にも展開していたとみられることから、大板営子墓地全体では他にも同規模の単位集団が複数存在し、それらがまとまって一つの同族集団を形成していたものと推測される。

ところで、中国に比べて人骨の遺存状況がさほど良好ではない日本においても、近年、墓制から親族構造を復元する研究が深化している。日本では、出土人骨の性別のみならず、歯冠計測値を用いて血縁関係を判定する手法が早くから導入されおり、田中良之は同一墓から出土した複数の人骨の関係を同手法を用いて分析し、家長とその妻が合葬される形態は６世紀以降になって登場するとし、兄弟原理の埋葬が中心の５世紀以前は双系的な社会であったことを指摘した（田中1995）。

ただし、歯冠計測値には他人の空似が存在する可能性もあり、信頼性を疑う意見もある。近年、清家章は、歯冠計測値による判定を補う方法として、頭蓋形態の小変異の分析を加

え、両者から被葬者間の親族関係を推測する方法を新たに導入した。また、清家は、人類学的アプローチのみならず、考古学的手法からも研究全体の補強に取り組み、人骨と副葬品の共伴例に基づいて、人骨が遺存しなかった墓においても副葬品の種類から被葬者の性別を推定する方法を確立させた（清家2010）。人骨の鑑定は、専門的知識と経験を要するため、筆者のような考古学研究者では容易に手が出せない領域であるが、清家の研究は、人骨の鑑定成果を踏まえつつ、墓の位置関係や構造、副葬品の種類といった考古学的情報を加味して分析を深めることで、親族構造に関する有益な情報を引き出し得ること示した点で、重要な成果といえる。

清家の研究成果によると、日本の古墳時代（3～6世紀）では、鏃・甲冑・鍬形石は女性人骨との共伴例がなく、それらの出土は男性墓であることを示すという。清家は、軍事に関わる権能を女性が有していなかったことが、男女で武器・武具類の副葬の有無に相違が生じた理由であると指摘する。ここで検討した大板営子墓地でも、鏃は男性墓のみから出土しており、軍事的権能と性差の関係は時代、地域を問わず普遍的である可能性が高い。武器類が男性人骨に伴う事例は、紀元前後の吉林省老河深墓地でも指摘されており、ここでは必ず男女がペアで合葬される（同穴合葬と異穴合葬の両者があるが、いずれも男性が右、女性が左に配置される）ことから、夫婦がペアで埋葬されたものと推測されている（宮本2009）。

このように、中国では、日本よりも総じて墓制から性別差が読み取りやすい環境にあり、また夫婦原理の埋葬が早くから存在した可能性があるなど、墓制にみる親族構造のあり方は日本ほど複雑ではないことが見込まれる。しかしながら、骨から得られる親族構造に関する情報は、性別や年齢のみならず、血縁関係、女性であれば妊娠痕の有無など、多岐にわたる。大板営子墓地に対するここでの検討は、一世代の基本単位が10人程で、ほぼ同数の男女で構成されるという点を明らかにしたのみで、単位内の血縁関係や出自、被葬者間の具体的な関係にまで迫ることはできていない。それらに迫るには、さらに詳細な人骨の分析が不可欠である。人骨の遺存状況の良い中国大陸では、こうした人類学的分析と考古学的成果を統合することで、古代の社会構造に関する研究が飛躍的に発展をとげる余地が大いにあるといえよう。

一方、日本では、人骨の遺存状況に恵まれないからこそ、墓地の構造や造営過程、副葬品の構成といった考古学的情報とあわせて、限られた人骨の分析結果を最大限活用し、古代の親族構造を復元する研究手法が深められてきたといえる。その結果、現段階の到達点として、日本では古墳時代前半期までは双系的な社会であったが、5世紀以降、朝鮮半島をめぐる軍事的緊張を受けて、上位階層から地位継承の父系化が進行するというモデルが提示されるに至っている（清家2010・2015）。今後、同様の手法を用いて、日本列島の社会

が直接・間接的に接触したであろう同時期の中国や朝鮮半島の親族構造に関する研究が深まることで、日本列島における親族構造の変化の歴史的意義や要因をより積極的に論じることが可能になるものと期待できる。

6．おわりに

この小論では、大板営子墓地の検討を通じて、いくつかの見解を提示できた。まとめると以下のようになる。

①大板営子墓地の副葬品の内容、埋葬施設や木棺の構造を検討し、初期慕容鮮卑の墓制の特徴を明らかにした。ただし大板営子墓地では、馬具類の副葬は一切認められず、副葬品も総じて簡素であることから、その造営集団は鮮卑の中でも階層的に下位に位置する集団であったとみられる。

②大板営子墓地では、造墓開始当初は伝統的な鮮卑の墓制を引き継ぎ、深い長方形の墓坑を穿ってその最下部に木棺を安置したが、ある時期、全面的に石槨墓に移行する。ただし、「片流れ形式」木棺は、木棺墓、石槨墓を通じて使用が継続した。

③木棺墓、石槨墓のいずれにおいても、鉄矛・鉄鏃・鉄斧といった武器・工具類は男性墓に、銅・銀製耳環、銅製腕輪・指輪、瑪瑙玉、陶器片転用・骨製紡錘車、骨製簪などの装身具類は女性墓に、副葬が集中する傾向が見出せた。

④大板営子墓地を営んだ集団は、一世代の男女比がほぼ同数からなる10人前後を基本単位とし、それらが複数集まってより大きな母集団を形成していたとみられる。

以上のうち、②の点は、広く３世紀代の朝鮮半島や日本列島で木棺墓・木槨墓が石槨墓に移り変わっていく現象と連動していくことも見込まれよう。喇嘛洞墓地でも、木棺墓と石槨墓の両者が存在することからも、両者を時期差とみる見解の妥当性や移行時期の詳細をさらに検証し、その背景を明らかにしていく必要がある。

また、③④の点は、今後、鮮卑の墓制を検討する際の重要な着眼点となろう。④の集団の編成単位については、やはり三燕期の総数420基を数える喇嘛洞墓地で検証を深めることが喫緊の課題といえる。さらに③については、鮮卑の墓制はもとより、それ以外の地域の墓制との比較の中でその特質を追及しなければならない。前述した内蒙古の初期鮮卑墓地である商都県東大井墓地では、男女合葬事例が頻繁にみられることもあって、副葬品にみる性別差は判然としないが、やはり武器・武具類は男性人骨、腕輪・指輪（銅製）は女性人骨に伴う傾向が看守できる点は注目に値する。

一方、武器・武具のみならず工具類も男性墓に集中する点は、女性墓からも工具類が出土する同時代の日本列島の状況とは明らかに異なる。両者の社会・集団における性的分業、ないしは他界観のあり方が異なっていた状況が推測できよう。そもそも、内蒙古の初期の

鮮卑墓地からは工具類は一般的に出土しないことからすると、工具類の副葬自体が、鮮卑による遼西地域への南下と定着を契機に加わった要素であることが見込まれる。いずれにしても、墓制にみる埋葬原理や親族構造、性的分業のあり方は、その集団の出自や性格、階層などの解明において重要な視点となる。ここでの検討をさらに発展させることで、鮮卑をはじめとする当該期の多様な部族や社会の集団構成のあり方やその特質を明らかにし、東晋十六国期における多様かつ複雑な歴史的・文化的動態を鮮明にしていくことが今後の課題といえる。

引用・参考文献

諫早直人　2014「大板営子墓地出土品の調査」小池ほか2014所収。
大谷育恵　2011「三燕金属装身具の研究」『金沢大学考古学紀要23』金沢大学人文学類考古学研究室。
大谷育恵　2012「漢－北魏期における耳飾の展開とその画期」『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念論文集。
岡林孝作　2004「中国における木棺と棺形舎利容器」『シルクロード学研究』vol.21中国・シルクロードにおける舎利荘厳の形式変遷に関する調査研究、シルクロード学研究センター研究紀要。
金田明大　2006「遼西地方における鮮卑墓出土土器の観察」『東アジア考古学論叢』奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古学研究所。
魏堅 編　2004『内蒙古地区鮮卑墓葬的発言与研究』科学出版社。
小池伸彦ほか　2014「遼寧省北票市金嶺寺遺跡および大板営子遺跡出土遺物の調査」『奈良文化財研究所紀要2014』。
清家章　2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会。
清家章　2015『卑弥呼と女性首長』学生社。
孫危　2007『鮮卑考古学文化研究』科学出版社。
田中良之　1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房。
谷畑美穂・鈴木孝雄2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社。
万欣　2010「遼寧省北票市大板営子墓地的勘探與発掘」『遼寧考古文集』２。
万欣　2013「朝陽発現唐代鉄器初歩的考察」『朝陽地区隋唐墓の整理と研究』奈良文化財研究所学報第91冊。
宮本一夫　2009「考古学からみた夫余と沃沮」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集。
遼寧省文物考古研究所ほか　1997「遼寧朝陽田草沟晋墓」『文物』1997年第11期。
遼寧省文物考古研究所ほか　2004「遼寧省北票喇嘛洞墓地1998年発掘報告」『考古学報』2004年第２期。
陳山　2013『喇嘛洞墓地三燕文化居民人骨研究』科学出版社。

挿図出典

図１・６：万欣2010　図２：諫早2014　図３・４：筆者実測　図５：万欣2010を改変
表１：筆者作成

1．鉄矛：上からM10、M8、M14出土

2．鉄斧：左M10，右M3出土

3．金銅耳環：M21出土（ほぼ等倍）

4．金銅耳環：M16出土（ほぼ等倍）

5．銅釧：M21出土（等倍）

図版１　大板営子墓地の副葬品１

1．鉄鏃：左からM2、M20、M6、M4、M6出土（1/2）

2．鉄釘：M8出土（1/2）

3．五銖錢：M13出土

4．花弁形飾金具：M20出土

5．紡錘車：左からM16、M21、M21出土

図版２　大板営子墓地の副葬品２

2．銀耳環：M16出土（等倍）

3．金銅耳環：M2出土（等倍）

4．銀指環：M7出土（等倍）

5．銅指環：M1出土（等倍）

6．鉄指環：M14出土（等倍）

7．瑪瑙玉：M7出土（等倍）

1．銅釧：上からM1、M22、M21出土（等倍）

図版３　大板営子墓地の副葬品３